

台湾におけるダークツーリズム： 「霧社事件」関連施設を中心に

一 戸 信 哉

はじめに

本稿は、日本人の「ダークツーリズム」の観点から、台湾観光の可能性を分析することを目的とする。台湾は、2019年まで日本人観光客にも人気の旅行先となっており、2019年には日本人観光客は200万人を突破した¹⁾。2020年については、3月以降大きく落ち込んでおり、新型コロナウイルス感染拡大が収束したとしても、今後の情勢は見通せない。ともあれ、国境を越えた人の往来が回復したときに、日本と台湾の人の往来は、再び回復することが予想できる。

台北で故宮博物院、夜市などを訪問し、人気のある九份や十份を加えて2泊3日から3泊4日ためぐるというのが、今日の台湾観光のメインストリームであるが、ここに「悲しみの記憶をめぐる」ダークツーリズムの視点を導入した場合、どのような可能性が考えられるか。本稿では3つの視点から現状を分析してみたい。

1つ目は、本稿で主に取り扱う、台湾の原住民族に対する統治の視点である。日本の台湾統治は1895年の下関条約による清の台湾割譲に始まる。現地住民による「台湾民主国」独立宣言と強硬な抵抗に遭遇し、やむなく軍政を施行、その後も軍人が歴代の総督をつとめてきた²⁾。特に、山地に暮らす原住民族の統治に苦戦し、銃器の押収、日本語による教育の普及、平地・内地観光などの理蕃政策を進めた。理蕃政策をすすめる中で、最大の蜂起事件（当事者は「戦争」と呼んだ）となったのが霧社事件である。1930年に起きたこの事件については、2011年に台湾で公開された映画「セデック・バレ」が台湾で大ヒットし、原住民族への関心も高まったと言われるが、2013年の日本での公開後、日本国内での関心が高まっているようには見えない。霧社事件への台湾研究者の関心は高いのだが、霧社へのアクセスにはそれなりの困難があり、日本人の台湾旅行者の間での知名度はさほど高くない³⁾。

2つ目は、日本統治時代の歴史建築や遺構に関する視点である。台湾ではかつて、国民党一党独裁体制の下、日本時代の遺構を破壊したり、史実を隠したりする動きもあった。民主化以後、歴史的建造物や町並みへの関

心が高まってきており、当時の日本の建築技術が結実した大型建造物の一般開放や、民間の古い建物などの保存修復やその利用も広まってきている。

こうした関心の高まりは、日本人旅行者にも及んでいて、特に台北に関しては、歴史的建造物をめぐる日帰りツアー（オプションツアー）の紹介も見受けられる。歴史的建造物や遺構は、もちろん、日本統治時代の悲しみの記憶との関連も有しており、日本人の台湾旅行者に、台湾への複眼的な見方を求めるものになる。

3つ目は、戦後国民党独裁政権下の台湾をとらえる視点である。終戦で日本が台湾を去り、国民党軍がやってきたあと、台湾の人々は「犬が去って豚が来た」と嘆き、国民党の強権的な独裁政治に長らく苦しめられた。この過程で、1947年に起きた、本省人民衆の抗議運動と大規模な弾圧が、二二八事件である。終戦後の台湾で起きたこの事件は、戒厳令下の台湾では長らくタブーとされてきた。

台湾の場合、日本統治時代への関心が高まった結果、関連する情報が可視化され、日本語でもアクセス可能な情報も多い。この点は、日本統治時代の歴史建造物が多く残るものの、情報へのアクセスが難しい中国本土（特に東北地方）、韓国、ロシア（サハリン／樺太）と異なる点であり、ICTを活用した個人旅行でダークツーリズムを実践するにあたってプラスに作用するものと考えられる。

本稿では、2018年12月に筆者が訪問した、霧社事件の遺構を中心に、台湾におけるダークツーリズムの可能性を探るものである。したがって、台湾全土の最新の状況については十分な調査が及んでいないが、過去に筆者が調査した内容も踏まえつつ、その可能性を探ることとする。

1. 台湾観光とICT利用

観光におけるICT利用は、個人旅行の自由度を大きく改善し、そのスタイルを大きく変えることを可能にした。特にスマートフォンの普及により、人々は渡航先で移動中にさまざまな情報を入手して、行く先々で柔軟に旅行計画を変更しながら、旅を続けることが可能になっている。

日本でも台湾でも、Googleを利用した地図情報や訪問先の地域の観光スポットについての情報などを、アプリで容易に得られるほか、ホテルや交通手段の予約なども簡単にできるようになった。台湾の場合には、同じ言語を用いる中国大陸側とは異なる独自のICT文化がある点に注目したい。

SNSについては、2020年現在、FacebookやYouTubeなどが台湾で普及しており、メッセージングはLINEが普及しているという⁴⁾。この点、海外サービスへのアクセスを厳しく規制する一方で、独自のSNSが普及している大陸側と対照的な状況になっている。中国独自のサービス、たとえば、メッセージングサービスとして大陸側で普及しているWeChatは、台湾では人気がなく、大陸からの観光客向けの支払手段としてWeChatPayが普及しているにとどまる。この点も日本との類似が見られる。

旅行のICT利用についてはどうか。たとえばタクシーアプリについては、55688台湾大車隊という台湾独自のサービスが広く普及している⁵⁾。サービス内容は、スマートフォンの位置情報を利用して、乗車位置と目的地を指定し、金額を確定した上で乗車、支払いもあらかじめ指定したクレジットカードなどでのキャッシュレス支払いが可能、というものだ。米国発のUber、中国大陸で普及するDiDi、マレーシア発で東南アジアで普及するGrabといったサービスと類似していて、台湾でもUberやLINEタクシーが参入しているが、台湾独自のサービスが力を持っている。このほか、レストランの口コミサービスでは、台湾独自のサービス「愛食記」⁶⁾が知られているし、台湾高鉄をはじめとして、鉄道のサービスでも独自アプリを利用した予約システムが普及している。

一方、日本統治時代の映像資料等についても、博物館等による修復やデジタル化が進んでいる⁷⁾。これにより、日本統治時代が映像等の資料でどのように表現されているかを確認しながら、現地を訪れることができるようになった。たとえば、1939年に制作された映画「南進台湾」は国立台湾歴史博物館によって修復されDVDとしても販売されている⁸⁾。この作品は、南方への前線基地としての台湾の重要性を強調することを目的に制作されているが、日本による40年以上の台湾開発の成果を網羅的に伝えようとしており、当時の様子をやや美化された形で確認することができる。台湾の場合には、日本時代の建築物が依然多く残されており、こうした映像資料を主体的に読み込んでいくことにより、「ダークツーリズム」の観点も取り入れつつ、現地を訪ねていくこともできるようになった。たとえば、映画「南進台湾」の中では、新竹の紅茶の生産風景が紹介されているが、これは日東紅茶の工場、おそらく角板山製茶工場であろう。日東紅茶というブランドは1933年に台湾で確立され、内地や海外で人気のブランドに成長している。戦後は台湾農林股份有限公司が「大溪茶葉」として運営、1995年に製造を停止したが、2010年に「大溪老茶廠」という名前で再建されて、観光スポットとして整備されている⁹⁾。こうした台湾の複雑な

歴史を背負った建物は、台湾各地に残っているが、これらを映像で確認しつつ訪ねることも容易になった。

2020年現在、新型コロナウイルスの感染拡大により、国境をまたいだ人の往来は困難な状況にある。その一方で、居住地の近くの知られざるスポットを見直す「マイクロツーリズム」が注目されている¹⁰⁾。台湾国内では、中国政府との関係をめぐる緊張関係に対して、さまざまに揺れる世論がある。近年、日本の報道でも、「天然独」（生まれながらの独立派）が若い世代に増えていると紹介されているが、実際には「独立派」というよりも、「すでに事実上独立している」として、現状を維持したまま、台湾社会をよりよくしていこうというニュアンスもあるようだ¹¹⁾。日本時代を含めた映像資料等の修復と公開は、中台関係の緊張とは切り離れた形で、ある種の「台湾アイデンティティ」を形成していく可能性も示しているといえるだろう。

本稿執筆段階では、ICTを積極的に活用した台湾の感染拡大防止の取り組みも頻繁に取り上げられている。台湾におけるICTの浸透度を示すものともいえるだろう。台湾のデジタル担当大臣であるオードリー・タン（唐鳳）は、新型コロナウイルス対策における3つのF、「Fast（高速）」「Fair（公平）」「Fun（楽しい）」が、抑え込み成功に寄与したとしている¹²⁾。具体的には、1）健康保険証の提示によるマスクの無償配布、2）オープンデータを利用した薬局のマスク在庫情報のリアルタイム更新、3）AI対話ロボット「蘭医師」を利用したサポート（医療機関の負担軽減）などを挙げている。

ICTの浸透と「台湾」の歴史の見直しは、一見バラバラの現象に見えるが、「悲しみの記憶をたどる」ダークツーリズムを成立させる要素としては、関連がある。ICTの浸透とデジタル化は「記憶の解凍」を支援し、歴史的コンテンツが、台湾の歴史への関心を広げる役割を担う。これは台湾の人々自身の関心に応えるものであると同時に、かつて台湾を統治していた、日本人の関心にも応えるものになるだろう。

2. 霧社事件の関連施設・遺構の現状

2-1. 霧社事件の概要

霧社事件については、過去にも多くの論考があるが、本稿でも概要を述べておく¹³⁾。霧社事件は、1930年10月27日、台中州能高郡霧社（現南投県仁愛郷）で起きた、抗日暴動事件である。頭目モーナ・ルーダオを筆頭に、原住民族セデック族約300人が、運動会の会場である霧社小学校を襲

撃し、140人ほどの日本人を、首を切り落として殺害している。蜂起の原因は必ずしも明らかではないが、「第1に、労役強制の問題、第2に山地先住民と日本人の間の通婚問題、第3にマヘボ社頭目の不満の問題」¹⁴⁾などが考えられている。

映画「セデック・バレ」においては、マヘボ社で行われていた結婚披露宴の席上、日本人巡査がモーナ・ルーダオの息子タダオ・モーナをステッキで叩いたことが、直接の原因とされているが、同時に労役の強制など複合的な要因が背景にあるという点も描かれている¹⁵⁾。

日本軍と警察は武力鎮圧を行ったが、セデック族は小学校から武器弾薬を運び出して山の中で抵抗を行った。日本は「味方蕃」と呼ばれた他の部族を戦闘に動員し、禁止していた「首刈り」を味方蕃に許したほか、機関銃、大砲、飛行機による空爆を含むあらゆる近代兵器を用いて鎮圧を行ったとされている。戦闘が完全に終了したのは同年12月であった。

この鎮圧に際して、日本軍が毒ガスを使用したのかどうか、この点は依然として議論があるようだ。周婉窈は、毒ガスを使用したかどうかについて、「事実の真相については、学者の間でも一致した結論が出ておらず、さらなる研究が待たれる」としている。林えいだいは、2002年に出版した著書の中で、毒ガスが使用されたという現地の人々の証言を紹介している¹⁶⁾。

2-2. 霧社山胞抗日起義記念碑（霧社事件記念公園）

筆者は、2018年12月26日、桃園から台中を経由し、霧社を訪問した。台中から路線バスを利用する場合、紹興酒の産地として知られる埔里まで行き、さらにバスを乗り換えて向かう必要がある。今回は、霧社からさらに上にある廬山温泉、また蜂起に加わったセデック族の人々が移住させられた川中島（清流部落）を短時間で回る必要があったため、タクシーをチャーターした。霧社山胞抗日起義記念碑は、霧社のバスターミナル、街の中心地から少し下ったところに、小さな公園「霧社事件記念公園」として整備されている。「碧血英風」の文字が刻まれた入り口の白い門をくぐると、その中にモーナ・ルーダオの墓と無名兵士の墓が設置されている¹⁷⁾。訪問した日は平日ということもあり、他の訪問客に遭遇することはなく、霧社の中心地からも少し距離があるためか、人通りもまばらであった。



霧社事件記念公園入り口の門（筆者撮影）



1973年に作られたモーナ・ルーダオの墓（筆者撮影）

公園の整備は、1952年、中台関係が緊張していた時期に、防空壕設置のために穴を掘っていたところ、霧社事件で亡くなったセデック族の人骨が出てきたのがきっかけである。1953年に公園として整備されるとともに、記念碑が設置されている。モーナ・ルーダオの遺骸は、台湾大学に保存されていたが、1973年に返還されて、この地に葬られている。一方、襲撃で亡くなった日本人の慰霊碑は、霧社小学校の跡地に台座の部分が残っているが、すでに小学校はなく、電力会社の施設の敷地内にある。竹内康浩は、記念碑に関する論文のなかで、「…文章を検討して得られた認識は『結局これらは漢人が漢人の立場で作ったものに過ぎない』という至って平凡なものである。」としている¹⁸⁾。「蕃族」と言われた原住民族は、日本政府の理蕃政策の中でどのような苦難を経験したか。固有の文化はいかに尊重されるべきであったか。この公園を整備する際に、こうした点はあまり顧みられることはなく、「抗日」という文脈に単純にはめ込まれていったという趣旨であろう¹⁹⁾。

2-3. 廬山温泉とマヘボ社集落跡

霧社の中心地は、霧社小学校のあったエリアだが、モーナ・ルーダオを頭目とするセデック族マヘボ社の集落は、さらに高地標高1300メートルほどのところ、現在「廬山温泉」と呼ばれる観光エリアの中にあつた。廬山温泉は、霧社事件の後しばらくしてから、日本人によって「富士温泉」として開発され、終戦を迎えている。その後台湾に渡ってきた蒋介石がこの地を気に入って別荘を建ててたびたび訪れ、中国の廬山に似ているとして「廬山温泉」と名付けたとされる。2018年12月の筆者の訪問時には、霧社の集落から車で9キロ、15分ほどの山道の移動でたどりついた。到着してみたところ、明らかに活気がない。2008年に台風で大きな被害を受けて、復興は断念され、すでに移転が決まっているという。廬山温泉のシンボル

となっている吊橋の下を流れる川が、台風で氾濫し、川沿いの温泉ホテルがダメージを受けたという説明を受けたが、たしかにいくつものホテルが廃墟と化し、そのまま閉鎖に追い込まれたという様子が見てとれた。

往時の店やホテルの何割が、現在も営業しているのか、はっきりはわからなかったが、すべて閉鎖されたわけではない。本稿執筆段階でも、完全に閉鎖・移転したという情報は確認できていない。

「廬山」と書かれた吊橋を渡ってさらに進み、やや傾斜のある山道を登ってしばらく進むと、「莫那魯道の故居」との看板が見つかる。ここにモーナ・ルーダオが住んでいたとして、記念碑と小さな小屋のような建物があった。さらに先には、「古戦場跡」があるという表記もあったが、今回は時間の制約により訪問を断念することになった。実際には、小さな小屋と古戦場跡であることを示す石碑が立っている。「古戦場」というのは、霧社事件での戦闘があった跡のことである。これらの遺構は、映画「セデック・バレ」のヒットもあって、ある程度の人気を集めた時期もあるようだが、今回の訪問において、この場所を訪れる旅行者には遭遇しなかった。廬山温泉からの道もそれなりに険しく、健脚でなければ古戦場跡までたどり着くことは難しい。廬山温泉の移転がいつ行われるのかはまだ定かではないが、現在の温泉地に人がいなくなれば、さらに維持管理は難しい状況になるように見えた。



旧マヘボ社のモーナ・ルーダオ記念碑と 旧居（筆者撮影）

廬山温泉には、霧社の警官で、事件後に自殺したダックス・ナウイ（花岡二郎）の妻であった高彩雲（オビン・タダオ）氏が住んでいた碧華大飯店がある²⁰。すでに経営は高彩雲氏の家族の手から離れていて、ホテルもすでに閉鎖されているという。

蜂起に加わったセデック族6部落の人々は、戦闘の中で死亡した者、潜伏していた山中で自殺した者も多かったが、生き残った人々も、強制移住により川中島、現在「清流部落」と呼ばれている地域に移り、苦難の日々

を過ごしたとされる。

2010年に日本台湾学会報に掲載された、ダックス・パワン (Dakis Pawan, 郭明正) 氏の証言は、以下の通りである。

「…1930年10月27日に蜂起した、わがタックダヤの主力部落には、ホーゴ部落 (alang Gungu)、ロードフ部落 (alang Drodux)、スーク部落 (alang Suku)、ボアルン部落 (alang Boarung)、タロワン部落 (alang Truwan)、マヘボ部落 (alang Mehebu) の6部落があった。当時の6部落の人口は約1400人であったが、蜂起による戦役、および収容所での虐殺事件を経て、1931年5月6日に清流部落に強制移住された時には、約102戸298人となっており、そのほとんどは老人、病弱者、婦人、子供で、102戸の中で本来の家族構成を保っていた家は一軒もなかった。強制移住させられた最初の頃は、族人の中には、風土が合わず病気で亡くなる人、故郷や亡くなった身内を思い、あるいは自己の悲惨な境遇への憂憤のあまり自殺する者がいた。そのため日本統治時代の戸籍資料によると、1939年には清流部落は73戸203人に減少したことがはっきりと記録されている。」²¹⁾

清流部落は、廬山温泉から霧社と埔里を經由して50キロ、霧社から40キロほどの距離がある。当時川中島と呼ばれたこの場所は、戦後清流部落と改められた。ただし集落の入口、バスターミナルには、「川中島」と書かれた看板が掲げられており、古い地名が完全に忘れ去られたというわけではないようだ。狩猟で生計を立てていたセデック族は、この平地に移り住んで、マラリアに苦しみながらも農業を営んだという。

2-4. 清流集落 (旧川中島)

霧社事件で蜂起したセデック族の人々が川中島に移住したのは1931年5月6日であるが、それに先立つ4月25日に、「第二霧社事件」と呼ばれる襲撃事件が起き、210数名が死亡している。上のダックス・パワン氏が証言する約102戸298人というのは、第二霧社事件後に生き残った人数であろう。第二霧社事件は、「味方蕃」と呼ばれた別の部族タウツア社の人々が、警察から支給されていた武器を用いて、収容所に集められていたセデック族を襲撃した事件である。タウツアとセデックの間には以前から対立があり、タウツアが、以前に総頭目を殺されたことへの報復をはかった形だが、日本の警察が実質的に関与したという証言もある。

その後生き残ったセデックの人々の中でも、反乱に協力したと疑われる者にはさらに厳しい取り調べが行われ、逮捕されたものの多くが留置中に死亡している。

清流部落の中には、セデック族の伝統文化を象徴するようなレリーフが多く展示されている。集落を奥に進んだところに、霧社事件の余生記念碑と余生記念館という建物がある。余生記念碑は、1950年、高永清氏が仁愛郷郷長であったときに、川中島神社の跡地に建立され、その結果日本風の灯籠が残されている。高永清氏は、蜂起したホーゴ社出身で、本来の名前はピホワリスといった。霧社事件の後、日本側の斡旋により、自殺したセデック族出身の警官ダッキス・ナウイ（花岡二郎）の妻であった高彩雲氏（オビン・タダオ）と結婚し、川中島に住んだ人物である（廬山温泉の旅館経営も後に行っている）²²⁾。

隣の余生記念館は、セデック族の歴史を詳しく展示している資料館となっている。霧社事件の原因、日本による掃討作戦の様子、他部族「味方蕃」による襲撃、川中島への移住とその後の困難などが詳しく解説されている。第二霧社事件で、殺されたセデック族の人々の首を並べて、警察官と「味方蕃」が記念撮影している写真も展示されている。また、のちに、清流部落から、高砂義勇隊²³⁾に志願した人々のことも紹介されている。1935年、「生蕃」「蕃人」と称されていた原住民族の呼称は、「高砂族」に改められている。1942年に高砂義勇隊の募集が始まると、川中島の多くの若者が志願し、33人の青年が出征、20名が南方に、13名が花蓮に派遣された。南方に送られた20名のうち、12名が戦死した²⁴⁾。高砂義勇隊やその後の志願兵募集には、各地の原住民族の青年たちが多く志願しているが、特に川中島の若者たちは、皇民化教育の影響とともに霧社事件の汚名をすすぐという思いが強かったという証言が残っている。



清流部落の霧社事件余生記念碑
(筆者撮影)



清流部落の霧社事件余生記念館
(筆者撮影)

以上見たとおり、霧社事件をめぐるのは、霧社、廬山温泉、清流部落（川中島）という3つの拠点がいずれも仁愛郷の中にあり、短時間ですべてをめぐることも可能ではある。ただし公共交通機関での移動にはかなりの制約がある。霧社事件に関心を持つ日本人も少なくはないので、ウェブ上に旅行者の体験が記述されていることも少なくはないが、台湾観光の専門サイトに十分な情報があるとはいえない。

周辺の観光との連動についてはどうか。南投県最大の観光地は、台湾最大の湖「日月潭」である。日月潭は風光明媚な観光地として、日本統治時代にもよく知られているほか、現在は文武廟、玄奘寺、慈恩塔、サイクリングロード、九族文化村などの観光のパッケージが整っている。また日月潭は、日本統治時代に、大規模な水力発電所の建設が行われており、その観点でも興味深い遺構が残っている。

1919年に台湾電力株式会社が設立され、社長となったのが松木幹一郎である。世界恐慌の影響、マラリア、アメーバ赤痢、ツツガムシなどの被害などにより、発電所の建設工事は難航し、最初の水力発電所が完成するのは15年後の1934年であった。日月潭の発電所は現在も名前を変えて運転をつづけている。松木の死後、湖畔に建てられていた銅像は金属供出で撤去されたが、2010年に復元されている。また、工事の際に殉職した工員たちの慰霊碑も残っている²⁵⁾。

日月潭行きのバスは、台北、台中、埔里などから多数出ている。ただし、日月潭をターミナルとして周辺の霧社などへアクセスするのはやや困難がある。ターミナルとなる埔里をベースに、紹興酒工場などの埔里の伝統産業の訪問と、観光地として魅力ある日月潭と組み合わせて、霧社に関心を持つ日本人向けの観光を、構想することはできるだろう²⁶⁾。

また日月潭と阿里山の間には直通バスが走っているので、日月潭から阿里山に移動することもできる。阿里山からはかつて、良質な紅ヒノキが多数産出され、日本の神社仏閣でも多く利用されている。森林資源の産出のために建設された阿里山鉄道は現在も健在で、日の出を見るためにやってくる観光客も多い。阿里山の遊歩道には、阿里山開発に尽力した林学博士河合銚太郎を顕彰する琴山河合博士旌功碑が建つ²⁷⁾。河合は森林伐採とともに植林による資源保護を行い、「阿里山開発の父」とされている。一方、戦後阿里山は、無計画な伐採により資源が枯渇してしまい、現在森林伐採は行われていない。

2-5. 莎韻紀念公園（宜蘭県南澳郷）

南投県とは離れるが、霧社事件とのつながりがある場所として、台湾東部宜蘭県南澳郷にある莎韻紀念公園（サヨン紀念公園）についても触れておきたい²⁸⁾。サヨンというのは、タイヤル族の実在の人物で、1938年に出征する日本人の先生を見送りに行き、雨の中丸木橋を渡っているときに流されてなくなった少女である。サヨンの悲劇に対して、のちに台湾総督が鐘を贈って追悼するとともに、西條八十作詞、古賀政男作曲で「サヨンの鐘」という歌がヒット、1943年には満洲映画のスター李香蘭主演で映画化されている。

映画「サヨンの鐘」は、この宜蘭県での実話をもとに制作されているが、霧社周辺の村で撮影されている。サヨンの住んでいた村ではなく、霧社が選ばれたのは、事件から10年をすぎて、理蕃政策がうまくいっていることをアピールする狙いがあったともいわれる。

また、「サヨンの鐘」という曲は、渡邊はま子がうたって映画より先に作られているが、もう一つ、劇中で歌われる歌に「蕃社の娘」がある。この歌を歌っている歌手名は、日本の国立国会図書館の歴史的音源データベースでは「サワサツカ」、台湾国立歴史博物館のデータベース「臺灣音聲100年」では、「サワ・サツカ（佐塚佐和子）」となっている²⁹⁾。佐塚佐和子は、霧社事件で殺害された日本人警察官とタイヤル族白狗群の総頭目の次女ヤワイ・タイモの間に生まれた長女である。父愛祐の死後、東京の東洋音楽学校で学び、歌手となって活躍した。原住民族を恭順させるのに苦労していた日本が、「通婚」という方法を用いた結果、日本人と少数民族、日本と台湾の間で翻弄されたのが、結婚した当事者たちであり、その子孫たちであった³⁰⁾。戦後、「サヨンの鐘」は「月光小夜曲」、「蕃社の娘」は「十八姑娘一朵花」、というタイトルの曲として、現在も台湾で歌い継がれている。

以上のように、映画「サヨンの鐘」を軸に、いくつかのポイントで「莎韻紀念公園」と霧社はつながるのだが、両地の間を短時間で移動するのは難しい。

2-6. 順益台湾原住民博物館（台北市士林區）

台湾原住民族の生活文化を体験する施設は、台湾各地に大小さまざまな存在する。日月潭の近くにある九族文化村は、大規模かつ商業的な色彩の濃い施設の1つであろう。また、南部の屏東県馬家郷にある台湾山地文化園区は、台湾省政府が主導する国家プロジェクトとして、1987年に開設され

ている。いずれも80年代半ば以降の施設で、ことさらに原住民族の異質性を強調する姿勢を改めて、多様な文化を理解させるという姿勢が見られるという³¹⁾。

本稿では、こうした「テーマパーク」のような施設ではない一方で、台北などに短時間滞在する旅行者にも適した原住民族関連施設として、台北市士林区にある、順益台湾原住民博物館を挙げておきたい³²⁾。「順益」というのは、三菱自動車などの販売代理店となっている地元企業グループの名前で、オーナーの林清富氏が博物館の理事長をつとめる私立の博物館である。清富氏が収集した文物を寄贈している。

原住民族の居住地域の自然の特徴、各種族についての解説、生活、服飾、信仰などが4フロアに渡って展示されている。民族ごとの衣装の特徴や生活スタイルなど、原住民族の多様な文化を理解するための資料が整っているが、異質性を強調するような展示はない。

博物館の向かい側には原住民主題公園が整備されており、多様な民族の姿を彫ったレリーフが展示されている。

九族民族村や山地文化園区のような派手さやアトラクションはないので、「体験型」の施設としての訴求力が強いとはいいがたい。ただ、台北市内にあって、故宮博物院から近く、故宮博物院とのセット券の販売も行われており、訪問はしやすい。台北とその周辺で完結する短期間の観光においても、台湾の原住民族の生活文化の一端を知る機会となりうる。

3. 台北の歴史的建造物

霧社事件をはじめ、原住民族に関する遺構は、日本の台湾統治を学ぶダークツーリズムに最適な訪問先だが、その多くは台北から離れた場所にあり、アクセスがよいところほど、大なり小なり商業主義で歪められた姿を見せられることになる。一方日本時代の建造物については、神社のような宗教的な施設を別にすれば、台湾の場合にはそのまま建物が残っているケースが少なくない³³⁾。また台北にも日本時代の建造物や遺構が多数残されており、そこから日本時代を考える活動は短期滞在者にも可能である。2019年には、台湾在住の片倉佳史が、決定版ともいべき『台北・歴史建築探訪』を出版し、台北市内200件の建築物を調査してまとめている³⁴⁾。同書では、旧台湾総督府の総統府や旧総督府博物館の国立台湾博物館など、市内の有名な大型建築物だけでなく、個人宅や個人病院の建物なども幅広く取材し紹介されている。個人宅の中には、リノベーションによりレストランや公共空間として整備されているものもあり、台湾の人々の

「日本時代」への関心の高さを感じ取ることもできる。

片倉によると、台湾に残る日本時代の建築物は、「国民党による一党独裁の時代」に「日本統治時代の事績を排除する政策が採られ」たことにより、「排除されたり、改築を受けたり」した。たとえば、各地の神社は、その多くが破壊されているが、石灯籠や狛犬の一部が残されていることもある。台北にある台北神社は破壊され、跡地には台北を代表する高級ホテルの一つ、圓山大飯店が建てられているが、この敷地の中には狛犬が残っている³⁵⁾。

1990年代に入って、こうした古い建築物を歴史遺産として保存する動きが現れ、さらに2000年代になると、廃墟と化した建物を修復・整備して利用する動きも見られるようになった。

先に述べた日本の統治時代の映画「南進台湾」では、日本の統治がいかに台湾を発展させてきたかを内地の人々に認識させる狙いからか、近代建築が立ち並ぶ「都会」としての台北が強調され、現在も健在の建物が多数登場している。また、台湾総督府登録写真家であった李火増の撮影した写真をカラー化した写真集が、2019年に出版されているが、日本統治時代の台北を中心とした風景写真にも、多くの建築物が登場している。片倉の紹介する200件もの建築物を、短期間の台湾滞在ですべて訪ねるのは不可能だが、こうした過去の映像資料と見比べることなどにより、絞り込みを行うことは可能になっている。以下、片倉の解説に依拠しつつ、主要な建築物を挙げる。

一総統府：旧台湾総督府。1919年竣工。デザインは懸賞金付きコンペで募集され、新潟県高田市（現上越市）出身の長野宇平治のデザインが採用されている。長野は、東京駅をデザインした建築家の辰野金吾に師事しており、結果的に東京駅と類似したデザインになったと考えられる。現在は一般にも公開されている³⁶⁾。

一中山堂：旧台北公会堂。1936年竣工。設計は台湾総督府技師であった井出薫。台湾地区の降伏受諾式典もここで開かれており、日本統治時代の写真や映像の背景にもよく登場する³⁷⁾。

一国立台湾博物館：旧台湾総督府博物館。1915年竣工。博物館3Fには、それぞれ第4代台湾総督であった児玉源太郎と、民生長官だった後藤新平の銅像が設置されている。この2つの像は日本時代、1Fに設置されていて、戦後は長らく撤去されて倉庫に眠っていたものが、2008年に再び展示されたという³⁸⁾。

－台北二二八紀念館：旧台北ラジオ放送局。1947年の二二八事件で重要な役割を果たした放送局である。二二八事件は、専売品であったタバコを闇で販売していた女性が、専売局の取締で殴られて怪我をしたのがきっかけで、民衆による抗議運動に発展した事件である。デモ隊の一部が当時ラジオ局であったこの建物に押しかけて、事件の発生を台湾全土に伝え、抗議運動は全国に波及する。

この事件の背景には、国民党が台湾人を政府要職から排除したこと、タバコ、酒、製糖などの事業を政府が独占したこと、軍や警察の規律が乱れていたこと、などがあったとされる。1920年代から30年代にかけて、日本に対して自治運動を展開していた台湾の人々が、日本の敗戦によりその主張が実現されるはずだったところ、期待を裏切られて反発が起き、弾圧を受けることとなった。

紀念館は、かつて新公園と呼ばれていた現在の二二八和平公園の中にあるが、公園内には、ラジオ普及前に日本全国の公園などに設置された、ラジオ塔が今も残っていて、事件の際のラジオの役割について、想起させる役割を果たしている³⁹⁾。

－国立台湾大学附設医院旧館：旧台湾総督府台北医院。1916年竣工。設計は、台湾総督府技師であった近藤十郎。台北の辰野式建築の一つ。基礎土台を1メートルとして、全体が中二階の高床式のような構造にしたのは、通風、採光、湿度調整が考慮された結果だという⁴⁰⁾。

－西門紅樓：旧公設西門町食料品小売市場。1908年竣工。設計は、台湾総督府技師であった近藤十郎。建物の形から「八角堂」と呼ばれていた。現在は郷土の歴史を展示する空間として整備され、夜にはライトアップも行われている⁴¹⁾。

－台湾菸酒股份有限公司：旧台湾総督府専売局。辰野金吾の弟子、森山松之助の設計。普段は非公開⁴²⁾。

－林田桶店：戦前から続く手作り桶専門店。現在も三代目が営業していて、訪問者によるInstagram投稿も多い⁴³⁾。

－新富町文化市場：旧公設新富町食料品小売市場。1921年開設。日本時代の町名を市場の名に遺している。2017年に修復工事を行い、公共空間に作り変えられている⁴⁴⁾。

4. 台湾東部の遺構

台湾東部は、日本の統治時代初期まで、中央山脈を隔てた西部に比べるとかなり開発が遅れ、東部の中心地花蓮は陸の孤島だったといわれる。総

督府が農業を奨励したことで移民村ができ、同時に道路、鉄道、港の整備も進んだ。現在も、台湾高鉄（新幹線）で高速移動が可能になった西部とは異なり、東部は移動にも時間を要する。

4-1. 文天祥公園（花蓮県）

台湾東部観光の目玉となっているのが、大理石の岩盤の大峡谷で知られる、太魯閣国家公園である。日本統治時代にも国立公園に指定されていた。その中にある文天祥公園は、宋の時代の人物文天祥を記念した公園で、地名も現在は天祥となっている。日本時代には、タビトという地名で、この公園には第5代台湾総督佐久間左馬太を祀った、佐久間神社という神社があった⁴⁵⁾。

霧社方面からもバスで中部横貫公路を通して太魯閣まで抜けることはできるようだが、本数も少なく乗り換えも多いので、一般の旅行者の利用は難しい。

佐久間左馬太は、「理蕃5ヵ年計画」の中で中部横貫公路を整備し、原住民の討伐を行ったことにより、ここに祀られたというのが、神社設置の経緯である⁴⁶⁾。戦後は1956年から4年間かけて、国民党政権がこの道路を整備し、中国との内戦に備えて物資補給路を確保したとされているが、動員された退役軍人たちのうち212人が、険しい山岳地帯での建設作業で亡くなっている。この犠牲者を弔うために建てられた祠が、「長春祠」である。こちらは滝の美しさもあり、立ち寄る人々が多い。太魯閣は、統治した日本や国民党政権から見た場合の意義と、討伐されてきた側の原住民族から見た意義は大きく異なる。景勝地であるとともに、「台湾ダークツーリズム」に適した場所といえる。

4-2. 松園別館（花蓮市）⁴⁷⁾

東部の都市花蓮市には、日本時代末期の軍の施設、陸軍軍事部が松園別館として保存されている。敷地内の防空壕跡には、神風特攻隊についての展示があり、この建物で、特攻隊として出撃前の兵士が御神酒を賜ったという。現在はカフェも併設された公共施設となり、文化活動が行われており、花蓮を代表する歴史的建造物として保存・利用されている。

高台にあるこの建物からは、花蓮市街が一望でき、日本統治時代から今に至る花蓮市の発展について考えるに適した場所であると同時に、日本の南進基地とされた台湾と太平洋戦争についても理解を深めることができる。

4-3. 宜蘭飛行場の掩体壕（員山機堡、宜蘭県員山郷）

台湾北東部の宜蘭には、日本海軍の飛行場があったため、飛行機の格納庫である掩体壕が残されている。2009年の片倉佳史の記述では、当時は周辺に暮らす老人たちの休憩所となっていたという。掩体壕は私有地を徴用して作られたため、その後の修復保存の際にそのまま所有者に返還されて放置されたり、倉庫として活用されたりするという事例は日本国内にも見られる。

片倉の取材したものと同じかどうかは未確認だが、員山機堡という名前で呼ばれる掩体壕は、保存修理の上、竹製の飛行機の模型を設置して、一般に公開されている。日本国内では、大分県宇佐市が、宇佐海軍航空隊の関連遺構の修復保存を行っており、その中に掩体壕も含まれている⁴⁸⁾。掩体壕は「かまぼこ型」の形状が目を引くため、観光客の関心を引きやすい遺構でもある。日本国内と台湾の掩体壕の情報をつなげることにより、当時の状況に関心を持ってもらう導線にすることはできるだろう。

4-4. 台湾東部の移民村の遺構

東部花蓮から台東にかけてエリアには、日本からの移民により「移民村」がいくつも形成され、その遺構が残っている。このうち旧林田村（花蓮県鳳林鎮）や旧豊田村（花蓮県壽豊郷豊裡村）はよく知られており、旧林田村では開村100年を記念して日本式の神社が再建されている⁴⁹⁾。

最初の入植地とされる吉野村（花蓮県吉安郷）には、七脚川事件記念碑が残っている。七脚川事件は、アミ族と日本人の対立から発生した衝突事件で、討伐されたアミ族の人々は土地を追われ、そのあとに日本人が移民村を作ったとされている⁵⁰⁾。

台湾の移民村への移住者は、西日本出身者が多かったとされるのが、その中であって、台東県鹿野郷にあった旧鹿野村（現龍田村）は、新潟県からの移住者が多かったといわれる。現在は、龍田博物館という施設が崑慈堂という中国式神社に併設されていて、その中で龍田村の歴史を展示している。

いずれの町にも日本式家屋が多く残っていて、近年保存修復への関心が高まっていることがうかがわれる。

台湾の移民村は、引揚げの混乱で多くの悲劇を生んだ満蒙開拓団のような状況を想起させるものではなく、その意味では日本人の関心が高まりやすいとはいえない。また、東部の都市間の鉄道移動にはそれなりの時間がかかり、移民村のような郊外へのアクセスにも時間的制約があるのが現実

である。

5. 台湾南部の遺構

台湾南部は、北部とは異なり熱帯に属し、かなり温かい気候となる。台北などの北部とは異なる、南部の独自文化については、よく現地で話題に出るところであるが、本稿ではその点には立ち入らず、高雄にある戦争関連の施設を中心に紹介する。太平洋戦争において、台湾は「南進」の前線基地とされ、その中でも台湾南部が最前線と位置付けられたといえる。

5-1. 湯徳章紀念公園（台南市）

1947年二二八事件の際に、台南市民を救って犠牲となった湯徳章を記念している。1998年に湯徳章紀念公園に公園の名前が変更されている。市内にある湯徳章の旧宅を記念館として整備する計画も進んでいる⁵¹⁾。湯は日本人の父と台湾人の母の間に生まれ、高等文官試験司法科に合格した後、台南で弁護士となった人物である⁵²⁾。

5-2. 戦争與和平紀念公園主題館（高雄市）

高雄市旗津区に2009年に開館し、台湾人兵士のたどった足跡を伝えているのが、戦争與和平紀念公園（戦争と平和記念公園）主題館である。この公園には、主題館のほかに、「台湾無名戦士紀念碑」や「台湾歴代戦没将士英靈紀念碑」といった慰霊碑がある⁵³⁾。日本統治時代に日本軍に従軍した台湾籍の兵士たちは、戦後、国府軍に徴用され、さらに内戦後中国大陆に取り残されて人民解放軍に徴用されたケースもあるという。時代の狭間で苦しめられた元兵士には、補償問題が残っていることも認識させられる。

5-3. 潮音寺（屏東県恒春鎮）

台湾最南端、屏東県の猫鼻頭で、バシー海峡戦没者の慰霊を行っているのが潮音寺である。太平洋戦争の後半、日本から南方へ兵員や物資を輸送する船の多くが、台湾とフィリピン・バシー諸島との間にある海峡、バシー海峡で、米軍の潜水艦に撃沈され、10万人以上が亡くなったとされる。撃沈された輸送船の一つ「玉津丸」に乗っていた元通信兵の中嶋秀次氏（故人）が、戦没者を弔うために私財を投げ打って、1981年に潮音寺を建設した。

公共交通機関でアクセスする場合、高雄から恒春へバスで移動した後、

さらにバスで移動し、海沿いの公園として整備されている猫鼻頭公園から数百メートル歩くことになる。

潮音寺はアクセスが容易な場所にあるとはいえ、何より通常時閉鎖されていることからみても、多くの人々が訪れるための環境が整っているとはいいがたい。一方潮音寺管理委員会が運営するウェブページには、訪問の際の問い合わせフォームも用意されており、ある程度計画的に訪問するための情報は十分に提供されているといつてよい。

おわりに

現代日本において、台湾は気軽に行ける海外旅行先であると同時に、日本統治時代の名残を容易に見ることができる場所でもある。一方台湾の人々は、中台関係を完全に破綻させることを避けながら、台湾の独自のアイデンティティを確立しようとし、その中で日本統治時代の建物や事象を再評価し、建物の修復、保全、活用の動きも見られている。

ダークツーリズムの遺構は、台湾全土に依然多く残っており、本稿の対象とすべき範囲はまだ多く存在している。その一方で、ダークツーリズムのような文化観光に関する情報は、まだ台北を中心とする都市部に集中している。日本での研究に一定の蓄積のある霧社関連施設でさえ、その例外ではない。

日本を含めて各地では、ICTを利用した旅行者への情報提供や利便性の向上についてさまざまな取組が行われている。2020年は新型コロナウイルスの感染拡大により、国境を越えた人の往来は大きく減少してしまったが、この間に関連するアプリやコンテンツを充実させることにより、ポストコロナ時代の新しい台湾観光の可能性も開けるものと考えられる。

※本研究はJSPS科学研究費補助金（科研費）18K12000の助成を受けたものである。

註

- 1) 「台湾への日本人観光客、200万人を突破:台北一極集中など課題も浮き彫りに」(nippon.com) <<https://www.nippon.com/ja/japan-topics/g00799/>>
- 2) 台湾統治初期、植民地か内地に組み入れるかについての議論がどのように行われたかなど、詳細については、「第4章台湾領有」小熊英二『<日本人>の境界』70-109頁。
- 3) 2020年で霧社事件発生から90年が経過したとして、日本でも報道された。台湾抗日蜂起「霧社事件」から90年記念碑前で追悼式「祖先の思い伝えたい」(毎日

- 新聞<<https://mainichi.jp/articles/20201027/k00/00m/030/377000c>> (2020年10月30日確認)
- 「霧社事件から90年追悼式で犠牲者子孫ら歌や踊りささげる」(中央社フォーカス台湾)<<https://japan.cna.com.tw/news/asoc/202010280001.aspx>> (2020年10月30日確認)
- 4) 台湾のソーシャルメディア事情については、Digital 2020:Taiwan —DataReportal—Global Digital Insights<<https://datareportal.com/reports/digital-2020-taiwan>> (2020年10月30日確認)
- 5) 55688台湾大車隊<<https://www.taiwantaxi.com.tw/>> (2020年10月30日確認)
- 6) 愛食記<<https://ifoodie.tw/>> (2020年10月30日確認)
- 7) 音声資料については、2015年に国立台湾歴史博物館が「臺灣音聲100年」というウェブサイトを開設し、いわゆる歴史的音源を公開している。
- 臺灣音聲一百年<<https://audio.nmth.gov.tw/audio>> (2020年10月29日確認)
- 音声百年ウェブサイト、台湾の歴史を紹介:Taiwan Today<<https://jp.taiwantoday.tw/news.php?unit=190&post=74932>> (2020年10月29日確認)
- 8) 永岡涼風・粹本誠一(監督)映画「南進台湾」(1939年)
- 9) 台湾農林股份有限公司:大溪老茶廠<<https://www.daxitea.com/tw/>> (2020年10月29日確認)
- 10) 井出明は、北陸での「ダークツーリズム」が、漫画やアニメの聖地を巡るような旅とともに、大きな可能性がある」と指摘している。「観光も『ニューノーマル』へ専門家に聞く石川」(朝日新聞デジタル) <<https://www.asahi.com/articles/ASNBW7KC4NBNPISC015.html>> (2020年10月29日確認)
- 11) たとえば、『台湾独立を「望まぬ」若者』と『民主化を進めた李登輝氏』の思い』NHKBS1「国際報道2020」<<https://www.nhk.or.jp/kokusaihoudou/archive/2020/01/0114.html>> (2020年10月29日確認)
- 12) 「3つのF」で抑え込みに成功——オードリー・タン氏が語った、台湾の新型コロナ対策|DIAMOND SIGNAL<<https://signal.diamond.jp/articles/-/292>>
- 13) 霧社事件についての文献については、詳細な文献目録が公開されている。北村嘉恵「霧社事件関連文献目録」教育史・比較教育論考、20、74-107頁(2010年)。この中で北村は、「霧社事件(1930年10月)については、台湾先住民族に関わる研究としては例外的に多くの文献が蓄積されてきた。」として、その関心の「集中」についての違和感を述べている。
- 日本台湾学会は、2010年5月に学会誌で「霧社事件」の特集を組んでいる。「特集『台湾原住民族にとつての霧社事件』」日本台湾学会誌12号。
- 14) 周婉窈『図説台湾の歴史増補版』(2013年、平凡社)112頁。
- 15) 魏徳聖(監督)「セデック・バレ 第一部:太陽旗 第二部:虹の橋」(2011年)
- 16) 「第3章 毒ガスの恐怖」林えいだい『台湾秘話 霧社の反乱・民衆側の証言』(新評論、2002年)。194頁-229頁。
- 17) この公園内で刻まれているモニュメントの文字を分析したものとして、竹内康浩「霧社事件の記念碑について」釧路論集—北海道教育大学釧路校研究紀要50号、1-12頁。
- 18) 竹内前掲論文、8頁。
- 19) 中国大陸側でも、霧社事件を「抗日」と結びつけることがある。2019年9月、筆者は中国大連市旅順にて、旅順日露刑務所旧址を訪れた。企画展として台湾「同胞」の抗日遺構に関する展示が行われていたが、その中では、霧社のモーナ・ルーダオの銅像を始めとする関連遺構が大きく扱われていた。

- 20) オビン・タダオの霧社事件に関する証言は、たとえば、「第2章 悲劇の女」林、前掲書、116頁-191頁。
- 21) ダックス・パワン (Dakis Pawan, 郭明正) 「Kari Alang Nu Gluban (清流部落簡史)」(訳 下村作次郎)、日本台湾学会報12号、2010年、59頁。
- 22) 高永清の証言として、中川浩一・坂本雅子「資料紹介・高永清「回想録」一川中島移住をめぐって」茨城大学教育学部紀要人文・社会科学・芸術36号(1987年)、13-22頁。
- 23) 高砂義勇隊の慰霊碑は、台北市近郊、新北市烏来区にある烏来高砂義勇隊主題紀念園区に設置されている。烏来山地文化村と隣接しているため、霧社周辺よりもアクセスはしやすい。
- 24) 林前掲書、28頁。
- 25) 古川勝三「台湾を変えた日本人シリーズ：台湾全島に電気をともした日本人——松木幹一郎」(nippon.com) <<https://www.nippon.com/ja/column/g00489/?pnum=1>>
片倉佳史「日月潭～景勝地と電力開発史、そして原住民族」交流、2018.12、No.933。
また当時発電所の工事を担当した鹿島株式会社のウェブページにも、日月潭での発電所工事に関する紹介記事が出ている。「鹿島の奇跡 歴史の中から見えてくるものがある 第8回 日月潭」<<https://www.kajima.co.jp/gallery/kiseki/kiseki08/index-j.html>>
- 26) 埔里に関する日本語観光情報も多くはないが、日本人が経営するゲストハウスもあるほか、ガイドブックにも若干の記述があり、ウェブによる情報も組み合わせ、南投県周辺の観光の拠点とすることはできる状況にある。埔里鎮立図書館の収集した埔里の古写真を共有するプロジェクト「埔里影像故事館」が、地域の歴史をたどる手がかりとなる古写真を公開しており、これを手がかりとして、埔里自体のダークツーリズムの可能性も見えてくるだろう。埔里影像故事館 (Facebookページ) <<https://www.facebook.com/BuLiYingXiangGuShiGuan>> (2020年10月30日確認)
- 27) 片倉佳史『台湾に生きている「日本」』(祥伝社新書、2009年)、131-138頁。
- 28) 片倉 (2009)、前掲書、206-219頁。
- 29) 流行歌：蕃社の娘—国立国会図書館デジタルコレクション<<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1316660>> (2020年10月30日確認)
蕃社の娘—臺灣音聲一百年<<https://audio.nmth.gov.tw/audio/zh-TW/Item/Detail/1c2c97be-446a-4e60-ac3f-cbebb228956d>> (2020年10月30日確認)
- 30) 原住民族の女性と結婚した、佐塚愛祐と下山治平の家族の戦後について取材したものと、鄧相揚『植民地台湾の原住民と日本人警察官の家族たち』(日本機関紙出版センター、2000年)。佐塚佐和子については、同書80-86頁。
- 31) 竹尾茂樹「台湾における『少数民族観光』の現状と課題」プライム28号、2008年、77-87頁。竹尾は山地文化園区について、先住民の側の展示・運営への参加を評価しつつも、文化の商品化などの負の側面は避けたいという点も指摘している。
- 32) 順益台湾原住民博物館<<http://www.museum.org.tw/>> (2020年10月30日確認)
- 33) 井出明は、韓国と中国との比較で、中国東北部では日本時代の建物が日常的に利用されているケースが多いと指摘している。井出明『ダークツーリズム拡張—近代の再構築』(美術出版社、2018年)、186頁。
- 34) 片倉佳史『台北・歴史建築探訪 日本が遺した建築遺産を歩く』(2019年、ウェッジ)
- 35) 台湾各地の神社遺跡については、「4 日本統治と神社遺跡」西牟田靖『写真で読む 僕の見た「大日本帝国」』(2006年、情報センター出版局)、84-93頁。
- 36) 片倉 (2019)、前掲書、14-17頁。当初の設計は長野だが、のちに台湾総督府の威厳を

強調することが求められ、同じ辰野門下の野村一郎と森山松之助によって、中央の塔をより高くする設計に改められた。

- 37) 片倉 (2019)、前掲書、24-25頁。
- 38) 片倉 (2019)、前掲書、42-44頁。
- 39) 片倉 (2019)、前掲書、50-51頁。
- 40) 片倉 (2019)、前掲書、52-53頁。
- 41) 片倉 (2019)、前掲書、66-67頁。
- 42) 片倉 (2019)、前掲書、94-95頁。
- 43) 片倉 (2019)、前掲書、206-207頁。日本統治時代の古写真をカラー化した作品集の中では、「バスのりば」という作品の背景に、林田補店の看板が確認できる。王佐榮『彩繪李火増－找回昭和美麗臺灣的色彩』(碧壁出版、2019年)、7頁。
- 44) 片倉 (2019)、前掲書、80-81頁。新富町文化市場は、2018年に老屋新生大賞で金賞を受賞している。台湾在住ライターの中中美帆が、市場の運営責任者である洪宜玲にインタビューを行っている。中中美帆「台湾の『歴史建築』活用成功の裏側を訪ねて」(Yahoo! ニュース個人) <<https://news.yahoo.co.jp/byline/tanakamiho/20190329-00119981/>> (2020年10月30日確認)。
- 45) 「佐久間神社」: 海外神社 (跡地) に関するデータベース 神奈川大学非文字資料研究センター <<http://www.himoji.jp/database/db04/permalink.php?id=1350>> (2020年10月30日確認)
- 46) 1914年の太魯閣戦役は、台湾総督である佐久間が前線に立ち、太魯閣の原住民族を約60日間の戦いの末に討伐したものである。一方、文天祥公園は、日本時代の痕跡を消すことはできたものの、原住民族の視点から出てきたものとは言い難い。原住民族の関わる歴史事件について、あらためて調査して、記念碑を設置しようという動きが、台湾政府に見られる。「文化部、先住民の歴史事件を調査 当事者納得の記念碑設置へ」(中央社フォーカス台湾) <<http://japan.cna.com.tw/news/asoc/202002280010.aspx>> (2020年10月30日確認)。
- 47) 松園別館官方网站 <<http://www.pinegarden.com.tw/>> (2020年10月30日確認)
- 48) 宇佐市は「うさんばナビ」というアプリを配布しており、その中でも市内の戦争遺構を訪ねることができるよう、情報が発信されている。宇佐市 うさんばナビ <<http://www.usanponavi.jp/support/>> (2020年10月30日確認)
- 49) 両エリアを取材した2017年のレポートとして、「台湾東部 日本の足跡残る 開墾、風土病と闘った移民村 当時伝える民家、神社 先住民の暮らしに影響も」(西日本新聞) <<https://www.nishinippon.co.jp/item/o/332091/>>
- 50) 註46で挙げた、原住民族の立場から再検証すべき事件の一つとして、七脚川事件も挙げられている。
- 51) 「2・28事件で市民救った弁護士旧宅 来年3月に一般公開の見通し」(中央社フォーカス台湾) <<http://japan.cna.com.tw/search/202008140004.aspx>> (2020年10月31日確認)
- 52) 湯徳章についてのノンフィクションとして、門田隆将『汝、ふたつの故国に殉ず:台湾で「英雄」となったある日本人の物語』(KADOKAWA、2016年)。門田作品を批判的に検証した論文として、天江喜久「台南の「救世主」となった「日本人」—湯徳章英雄説の検証と分析—」日本台湾学会報20号、2018年、126-147頁。
- 53) 公園の中にある「台湾無名戦士記念碑」は、元日本軍兵士であった許昭榮氏が私財を

投じて建設したとされているが、2008年5月に許氏はこの記念碑の前で焼身自殺を図っている。公園の名称から「戦争」をとりのぞいて「平和記念公園」とし、「無名戦士記念碑」を撤去する案も検討されていたことに、抗議の意思を示したと見られている。片倉佳史『『台湾人元日本兵』を弔う公園を訪ねる』（nippon.com）<<https://www.nippon.com/ja/column/g00545/>>（2020年10月29日確認）